

大平さんの「死」は大獅子吼

尾 本 信 平

私が大平さんに最後にお目にかかったのは、昨年五月十四日午前七時頃でありました。私は一橋大学時代の旧友小平久雄君と一緒に、五月十二日皇居において天皇陛下から勲一等の叙勲を受けたので、そのお礼のご挨拶に早朝、夫妻四人で私邸にうかがったのであります。総理は七時半にはご出発にならなければならぬといふのにゆっくりと腰かけられて、私達との会話に終始にこやかに対応してくれたのであります。ちょうどそれは、米国からユーゴのチトー大統領の葬儀に参列され、帰路西独シュミット首相との非常に重要な会談をされ、五月十一日帰国、十二日宮中において私どもの叙勲に勲記授与という激しい日程の後であつたのであります。

そこで私から「不況時の社長もメチャクチャ忙しいが、総理となるとケタ違いにご多忙ですね」と申し上げると、「なぬに皆でよくやってくれているので大したことはないよ。ただ私としては、日程をちゃんとこなしてゆくことを考えているだけだよ」と、目を細めて親しそうに笑ってくれたのであります。「でもその責任の重さから考えると、そのご心労は大変ですね。私らには想像もつかない」というと、「そりゃそうだけれども、企業の責任者、会社社長という立場も多くの社員や取引先、地域社会のことを考えなければならぬわけだし、人間個人としての責任の重さは同じではないかね」といわれて恐縮してしまいました。さらに私は「最近民間の労働組合員諸君の考え方は随分立派になっていきます。企業の将来を思い、さらには国の将来も憂うという気持が非常に強く、その基本的な考え方においては、経営者と少しも異なりませんね。彼らも立派な憂国の士です。総理の細

「私も是非そう願っているし、そうしたい。ところがなかなか実行となると、周りが難しくて気楽に気ままにはできないんでね」と嘆いておられました。

それからまもなく参議院選に突入、ご入院。サミットへはどうなさるか、ご自重なさるべきか、いや男としては倒れても行くべきか、などと要らぬ心配や私達なりに井戸端会議的な議論を寄るとさわるとしていたのでしたが、突如として逝かれてしまったのでした。亡くなられた朝、家内が大声で「大平さんが！」と、テレビを見ていて叫んだのに跳び起きた私は、全身の力が抜ける思いでした。何という残酷なことだ。私は腹立たしいやら、口惜しいやら、さらには憤懣やるかたなしという気持で、お通夜に出かけたのであります。

こんなことで良いのか、こんな国会の姿で良いのか、民主主義国会というのはこれが本当の有様なのか、政党とはこんなことで良いといえるのか、大平さんはどんな気持で天国に行くのだろうか、日本の将来、さらには四十億の人間どもの造り出す社会は、こんなことしかできないのか、など去来する思いで、お通夜の人波にもまれながら独り考えつつ霊前に立ち、ご遺影とご遺族にお目にかかったのでした。確か私の頬には、年がいもなく大粒の涙が流れていたことと思います。しかし日が経つにつれ、「大平さんは死して名を残すだけではなく、大きな反省を国民にも政界にも残した」という気持になることができました。やはり大平さんのシヨック的な「死」は千万言でも及ばぬ大獅子吼であったといえるのではないのでしょうか。

元旦に、お宅にうかがった時のこと、あまり良い枝振りでないゴルフスウィングなどが思い出されますが、ご冥福を祈ってやみません。合掌。